



このように錯覚アートは、小さいものが大きく見えたり、実際にはありえない形に見えたりと、ふしぎな感じがします。それもそのはず、錯覚アートは、見た人にふしぎな印象をあたえるように描いているからで、そこでは思いこみなどの「ものを見た人が、形や大きさなどを理解する仕組み（知覚パターン）」をうまく利用しているからです。



錯覚アートでは、知覚パターンを「ふしぎな感じ」を引きおこすように利用していますが、逆に「より本物らしく見せる」ために使うことも出来ます。

絵画の世界では、本当は平面である絵の奥行きを出すために、手前のものを大きく奥のものを小さく描いたり、手前のものはクッキリと奥のものはボンヤリと描いたりする遠近法えんきんぽうなどを使いますが、これも人の知覚パターンちかくを巧みに利用した例です。

身の回りでも、やせてみえる服とか、部屋を広くみせる模様替えもようがなど、知らないうちに錯覚と同じ効果をねらったものがたくさんあります。

これらの例は、作り手の意図いとしたものにみせるために、人の知覚パターンを利用して作られているという点では、錯覚アートと同じです。違うところは、錯覚アートは悪くいえば「人をだます」ために描かれているという点です。



ただし、錯覚は人がわざと作ったものだけにおこるわけではありません。自然の中でも、ぐうぜん錯覚を引き起こすことがあります。身近なものでは、昼間の太陽より夕方の太陽の方が大きく見える、というのがあります。（今月の話題299号「夕日のなぞ」に出てきました）

自然の中でも、本当のことを知るには見た目はんだんで判断するのではなく、よく観察することが大切です。（市川 真史）



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町 1-8-31 (TEL.076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

発行：平成16年7月1日